



日本野鳥の会

新潟県支部報

84年3月31日 VOL17

日本野鳥の会新潟県支部
(事務局)

〒950-21

新潟市五十嵐3の町
9753-26 石部 久

電話 0252 (61) 1416

振替 新潟 1-6002

私のフィールド

渋海川上流・越道川

村山 暁

信濃川の支流の1つに渋海川がある。松之山郷で、渋海川、越道川、東川の3本に分かれ、関田山脈(標高1300m前後)に源を発している。この源流付近から町の中心にある大松山にかけては、県立自然公園に指定され、自然が保護されている。近年、ダム、牧場、キャンプ場、林道等の開発の手が伸び、自然破壊が少しずつ進んでいる。

3本の川は、ブナやミズナラの高木を中心に、なだれ低木や多年生草木におおわれた複雑な地形に囲まれ変化に富み、鳥たちの棲みよい環境を作っている。

越道川は、我家のすぐ下を流れている。子供のころ、カジカやスナヅリ(カマツカ)を夜灯しに出て捕えたり、アカバヨ(ウグイ)ハヤ(アブラハヤ)を釣ったりした懐かしい川である。この越道川には、更に小さな支流や沢が何本も走り、サワガニやカエルの仲間が多数生息している。これらの小動物を主食にしているアカショウビンは毎年飛来し、その美しい声をきかせてくれる。

また、この川ではヤマセミが繁殖しており2月下旬からその鳴き声はにぎやかになる。川岸のヤナギの小枝や、岸から突き出た枝などに止って、じっとチャンスを待つヤマセミには、狩人の風格がある。その他、カワガラスやキセキレイ、セグロセキレイの水浴び、



5mの雪に埋もれた越道川(川幅20m前後)採餌などを見ることができる。

冬になると、カルガモに混じって、オンドリが10羽前後飛来する。その優雅な姿を見ると心がなごむのである。この越道川も大雪ですっかりうもれてしまい、鳥たちは採餌場を失ない困っていることだろう。

雪解けが待ち遠しいのは人間だけではないようである。上空を飛び交うヤマセミの鳴き声が、どこかもの悲しく感じるのは気のせいなのだろうか。

鳥の組みあわせ

上越教育大学

中 村 登 流

センサスと鳥類群集

最近、各地で鳥類のセンサスがよく行われるようになった。センサスというのは、鳥の種類と個体数を調べる作業であり、人の人口調査を鳥で行うことである。このセンサスは目的によっていろいろの程度で行うので、一概にはいえないが、必要があって、その結果を参考にさせてもらう時にしばしば不安を感じてしまう点が二つある。この不安がとりのぞかれることを願いながら、いくつもの結果を検討することが多い。その二つの点の一つは、種名しか書いてないリスト風のものに出合った時であり、個体数について何も書いてない場合である。少くとも多いとか、中位とか、でもよいから書いてあって欲しいと思う。もう一つは、環境のことが書いてない場合で、どうもかなり複雑な環境らしいと思える時である。少くとも、雑木林が何割位あるとか、荒地が何割位あるというような記載が欲しい。

例えば、鳥の種類の中にウグイスとオオヨシキリがあって、同じ位の数で出てきたら、その結果を見る人はどう思うだろうか。少くともウグイスとオオヨシキリが同所的、同時的に出てくる所はないはずだが、これはどうしたことだろうと思うにちがいない。ウグイスは疎林状でササの多い所に出てくも鳥であるし、オオヨシキリは水辺のヨシ草原に出てくる鳥であるから、そのセンサスコースには、ササの茂る疎林とヨシ草原がモザイク状に入りまじっているのだらうと考える。しかし、もし小きざみにくりかえされるササとヨシならばその面積は小さすぎて、どちらもいるはずはない。しかし、いかにもそれらしいヨシ草原があるとすれば、オオヨシキリはヨシゴイとかパンといった鳥などといっしょにいる方が似合いで、ウグイスとはとても一緒に考えられない。一方ウグイスの方はホオジロとかツジュウカラなどと共にいると納得ができる。

そこにいる鳥類全員のことを鳥類群集とい

うが、これはそこにある生物と非生物を含め、何等かの関係をもっている総体、つまり生態系の一つの構成成分のことである。生態系を構成する単位のようなものとして群集がある。鳥類群集はある一つの地方の鳥類の全部だから、そのとり出した一つの地方の区切りかたによって含まれる種類は、ずい分とちがう。しかし、もともと生物群集の一部であり、群集というものが、代謝活動をとおして、有機物を生産したり、消費したりする関係に加え同じものを消費するために生ずる競争や競合の関係が成立つ単位のことをさしているのだから、やたらにめちゃくちゃに区切った中の鳥類全部をいうのはおかしい。そこでもし区切るとしたら、ヨシ原はヨシ原の生物群集、疎林ササ原はまたその生物群集と分けて、単位としてあつかうのが普通だ。オオヨシキリはヨシ原の生物群集の一員で、パンやヨシゴイなどといっしょにいる方が、ヨシ原の鳥類群集の一員として妥当である。

そこで、オオヨシキリとウグイスとがいっしょにいるような所は、ヨシ原の鳥類群集と疎林ササ原の鳥類群集とがまじりあっている鳥類群集だということなのだ。それにもかかわらずヨシゴイやパンが記録に出てこないときには、それを見おとしたか、そのヨシ原の鳥類群集から、オオヨシキリだけが引きぬかれた何かの条件があるに違いない。そのため、変則的なヨシ原鳥類群集がまぎれこんでいることになる。

こういうことは、鳥類群集の考えかたの一



ヨシ原でさえずるオオヨシキリ



ササヤブの雑木でさえざるウグイス

つであり、その分析の方法の一つである。ヨシ原鳥類群集が単位としてはっきり調べられていてこそ、はじめて入っていける分析である。だから、単位としての鳥類群集を十分に調べることが何よりも望まれるので、これをとびこえて、オオヨシキリとウグイスのくっつくようなセンサスコースは、後まわしにすべきだといえる。つまり、センサスコースはやたらにとるのではなく、ヨシ原なら、ヨシ原に限るのが本筋だ。ヨシ原をつきぬけて疎林ササ原へ入っていく場合は、別の鳥類群集の中へ入ったという意識を持って記録にも、整理にもとりかかる必要がある。センサスコースにはこういう単位が、どれだけ入っているかをどうしても見ておく。オオヨシキリが少なくてウグイスが多ければ、その地方の鳥でウグイスが多いとは簡単にはいえない。それは、疎林ササ原の方に、よりウエイトをかけたセンサスコースだったということなのだ。もし、群集としてあつかうなら、ウグイスとオオヨシキリの入ってくる群集を第一義的にするのはまちがっている。でも、それはセンサスワーカーが勝手につくった群集だ。とうたがうのが最初だろう。

鳥類群集の中のウグイス亜科

ヨシ原の鳥類群集にはオオヨシキリが圧倒的に多い。疎林ササ原にはウグイスがやはり他を圧してたくさんいる。落葉樹林がもう少し、茂って来て、低木が多いとセンダイムシクイが出てくるし、常緑樹のカバーが多い藪だとヤブサメが多い亜高山の針葉樹林へいくとメボソムシクイがかなりの数で現われる。場所によって多少のちがいがあって、例えばブナ原生林であるとセンダイムシクイが多いのは各すじの傾斜面で下半分である。亜高山針葉樹林では、メボソムシクイはダケカンバのまじる所ほど多く、上方のシラビソの多い所ではむしろキクイタダキが多い。いずれに

せよ、それぞれの鳥類群集の中で、これらのウグイス亜科のメンバーは、割といろいろの所に顔を出し、しかも高密度種で、しばしば全鳥類の10%をこえることさえある。各間の亜高山針葉樹林の原生林ではメボソムシクイとキクイタダキ、それにエゾムシクイを加えて全鳥類の30%を越えることもある。また谷底に近いブナ原生林ではセンダイムシクイとヤブサメにウグイスをまじえて、やはり全鳥類の30%を越える所もある。

こうしてウグイスやムシクイ類がいない所は、草丈の短い乾いた草原とか、荒地、河原海岸の干潟、湖水面とか海洋などであって、植生が空中につき出してブッシ状以上になると、必ずや出てくるのである。そして、その多くは繁殖期だけで、冬にはいない。彼等の住み家たる藪以上の丈の植生に何があるのだろうか。

ウグイス亜科の夏のご飯はほとんど虫である。多くの鳥達は夏の虫の爆発にさそわれて植生の中へ入って行く、その中でウグイス類やムシクイ類は独特の虫の取り方をする。これを見ることはなかなかむずかしい。樹上生活をするメボソムシクイやキクイタダキはまだいいとしても、ヨシの中にいるオオヨシキリや、ササやぶの中にいるウグイスにいたっては容易に見られない。やぶの中にしゃがみこんでカヤブユとたたかいながら運良く鳥が通りかかるのを待つ。こうして見たかぎりではウグイス亜科のどの種にも共通の虫の取り方がある。それは頻りに首をめぐらして上方を見まわしては、枝や茎の間の空間をつかってさっと飛びついて虫をとる行動である。そして、せわしく、枝から枝へと移動して行く。ホーキングとかホバリングといわれる方法で虫をとるこの行動の特徴は、光をすかして見るようにして、少し離れた所から眺めて虫を探し、空間をひととびにまたいで虫に迫るのである。葉や枝の裏にかくれている虫の裏をかくのだ。それも、錯綜する小枝や茎のまわりの小さな空間でそれをやる。キクイタダキなどは針葉樹のしげみの中で、頻りにホバリングをくりかえして行く。この虫とりの場が植生の中に大量にあればこそ、そして虫がたくさんいさえすれば、そこにウグイス亜科の誰かが入っていく。そういうしくみが一つ一つ鳥類群集をつくって行ったにちがいない。

越後駒ヶ岳の鳥類 (中間報告)

柳 瀬 昭 彦

1. はじめに

越後駒ヶ岳は、越後三山の北方を占める標高 2003m、将棋の駒にも似た端正な山容の岩峰で、地質的には西側から山頂部一帯が水無川変成岩、千枚岩、結晶片岩などからなり、東側の佐梨川上流部は花崗岩層となっている。

この山の植生もまた、山頂から真南の方向へ走る中ノ岳への縦走路の稜線を境にかなり明瞭な対照を示す。すなわち、東側は尾根筋の一部にキタゴヨウが帯状に列なる他は、草原そしてミヤマナラから標高を下げるに従って



てブナ帯へと広葉樹林が広がるのに対して、西側は矮小化したダケカンバやサラサドウダンなどを混じえたキタゴヨウ、クロベの針葉

樹林となっている。小倉尾根からみた5月の駒ヶ岳と中ノ岳の中間部に「桧の廊下」と呼ばれる場所があるが、このヒノキとはクロベのことである。

この植生の違いは、主に冬の北西の季節風がもたらす降雪量の多少や融雪の遅速などの気象、地形の条件によって生ずるものだが、このことが鳥類相にも深いかかわりをもつことは後に述べる。

山麓から中腹部にかけては、奥只見地区と違って村里に近いので、古くから薪炭の材料として伐採されたために杉林やコナラ、ブナなどの二次林となっており、広大なブナの

原生林は、ほとんど姿を消してしまった。

2. 調査ルートと調査方法

越後駒ヶ岳の鳥類については、羽田ら¹⁾の調査や渡部²⁾報告があり、その鳥類相についてかなり明確にされている。

筆者は1972年から1982年の間に延29回の調査を行った。季節的には3月～12月、調査ルートは、枝折峠1065mから小倉山1420mを経て山頂2003mに至るコース、大湯温泉280mから駒の湯370mを経て小倉山に登るコース、水無川上流の金山橋335mから十二平487m、グシガハナ1811mを通して山頂へ向かうコース、それに山頂から中ノ岳への縦走路であり、この山の東・西両面の鳥類相の差異を解明することを心がけた。しかし、急峻かつ広大な地形のため調査不能の場所が大半を占め、その生息状況については未解明な部分が多いが、編集者より中間報告の形でよいからということで執筆依頼があったので、今後への資としてまとめてみた。

(表1.) 1982.5.22 駒の湯～小倉山

種名	個体数	占有率	メボソムシクイ	2	3
ジュウイチ	4	5	センダイムシクイ	3	4
ツツドリ	1	1	キビタキ	2	3
ホトトギス	1	1	オオルリ	1	1
キセキレイ	1	1	ヒガラ	2	3
ビンズイ	1	1	シジュウカラ	1	1
サンショウクイ	1	1	メジロ	3	4
ヒヨドリ	3	4	ホオジロ	3	4
ミソサザイ	3	4	クロジ	11	14
コルリ	7	9	ウソ	12	16
マミジロ	1	1	カケス	2	3
ヤブサメ	1	1	23種	76羽	
ウグイス	10	13	天気、くもり時々小雨		

(表2)

越後駒ヶ岳の鳥類目録

科名	種名	備考	科名	種名	備考
ガンカモ	1. カルガモ	大湯		38. ルリビタキ	山の西側
ワシタカ	2. ハチクマ			39. ジョウビタキ	秋・山麓
	3. トビ			40. マミジロ	
	4. ハイタカ			41. トラツグミ	
	5. ノスリ			42. クロツグミ	
	6. イヌワシ			43. ツグミ	秋の渡り
キジ	7. ヤマドリ		(ウグイス亜科)	44. ヤブサメ	
シギ	8. ヤマシギ	尾根筋の湿地		45. ウグイス	
ハト	9. キジバト			46. メボソムシクイ	
	10. アオバト			47. センダイムシクイ	
ホトトギス	11. ジュウイチ			48. キクイタダキ	冬・山麓の杉林
	12. カッコウ		(ヒタキ亜科)	49. キビタキ	
	13. ツツドリ			50. オオルリ	
	14. ホトトギス		エナガ	51. エナガ	
フクロウ	15. コノハズク		シジュウカラ	52. コガラ	
ヨタカ	16. ヨタカ			53. ヒガラ	
アマツバメ	17. アマツバメ			54. ヤマガラ	
カワセミ	18. ヤマセミ	大湯		55. シジュウカラ	
	19. アカショウビン	駒の湯	ゴジュウカラ	56. ゴジュウカラ	
キツツキ	20. アオゲラ		メジロ	57. メジロ	
	21. アカゲラ		ホオジロ	58. ホオジロ	
	22. オオアカゲラ			59. カンラダカ	秋の渡り
	23. コゲラ			60. ノジコ	山麓部
ツバメ	24. ツバメ			61. アオジ	春の渡り・山麓
	25. イワツバメ	大湯・コロニー		62. クロジ	
セキレイ	26. キセキレイ		アトリ	63. カワラヒワ	
	27. セグロセキレイ			64. マヒワ	冬・山麓の杉林
	28. ビンズイ			65. ウソ	
サンショウクイ	29. サンショウクイ			66. イカル	
ヒヨドリ	30. ヒヨドリ		ハタオリドリ	67. スズメ	大湯(銀山平)
モズ	31. モズ		ムクドリ	68. ムクドリ	大湯
カワガラス	32. カワガラス		カラス	69. カケス	
ミソサザイ	33. ミソサザイ			70. ホシガラス	
イワヒバリ	34. イワヒバリ	駒の小屋付近		71. ハシボソカラス	
ヒタキ	35. カヤクグリ	山頂付近		72. ハシブトカラス	
(ツグミ亜科)	36. コマドリ	山の西側	29科	72科	
	37. コルリ				

3. 調査の結果と報告

これまでの調査によって確認された鳥類は29科72種である(表2)。これらの種の中で越後駒ヶ岳の鳥類相を特徴づけている点について触れてみたい。

まず、山頂部は日本特産種のカヤクグリと駒の小屋付近の岩場を中心にイワヒバリがみられる。カヤクグリは近隣の山では平ヶ岳に多いが、駒ヶ岳にも少数生息する。同じく亜高山性の鳥であるイワヒバリは近隣の山での報告例はまだなく、この山に限って数が多いのは「はじめに」の項で述べたように岩場が多いため、同じ岩峰でも標高1778mの隣の八海山ではまだ観察されていない。

山の東斜面には針葉樹がみられることは先に述べたが、この樹林と結びついてコマドリおよびルビタキが少数生息する。こうした山の東あるいは南東斜面にコマドリがみられる現象は、魚野川右岸の2000m級の巻機山、平ヶ岳に共通する顕著な特徴で、表日本側に属する尾瀬の燧ヶ岳のような山の四面をオオシラビソに包まれ、従ってコマドリも四方に聞かれる山とは、はっきり異なっている。

夏季この山に登ると、中腹部ではコルリの声が断然多く、渡部²⁾の調査では、枝折峠～小倉山でのコルリの占有率は39%にも達する。そこでこの鳥を駒ヶ岳を代表する鳥といってもよい。しかし、表1によれば季節によって必ずしもコルリの占有率が高いとも言えない。山に残雪の多い時期は、むしろクロジやウソの方が多く、特にクロジはまだ飛来直後のためか登山道付近に少群で行動しており、渡部が指摘するように6月の繁殖期は林床にササの多いブナ林帯に分散するためロードサイドセンサスではカウント数が減るものと思われる。これに対してコルリは5月中、下旬にはまだ渡りが終わっておらず、(1981年の場合クロジの初認日4月27日、コルリは5月19日)殊に残雪の多い年はまだ里山で姿のみられる時期であることが占有率を低くしているとも考

えられる。こうした点が山岳地での調査の難しさを示しているともいえる。

ワツカカ類についても未分明の点が大変多いが、天然記念物のイヌワシはよくみられる。山の東南側での観察例が多く、北の岐川の上流部に営巣しているとの情報もあり、再三調査したが残念ながら営巣場所をつかむには至っていない。しかし、若鳥の飛翔もよくみられるので繁殖の可能性は十分ある。

秋の渡りは割と少なく、浅草岳や守門岳でみられるアトリの1000羽を越える大群やシロハラノ群、マミチヤジナイなどもまだ観察していない(1982 鳥類生息状況調査報告書P153)が、

ジョウビタキ、マヒワなどが山麓部にくる。

ブナの原生林がほとんど姿を消したため、ゴジュウカラも数が少なく、対照的に数年前から大湯付近にムクドリが、奥只見にスズメが姿をみせるようになり、鳥類相の面からも自然破壊、観光開発の影響をみることができ。この環境保全、自然保護という面からは最近話題の信濃川の水を北ノ岐川にダムを造って揚水する計画は考えるべき点が多い。この計画が実現すれば、北ノ岐川のイワナが減少し、この辺の原野の獣類を捕食しているイヌワシへの影響が大きく、生態系に及ぼす力のはかり知れないことを指摘しておきたい。

4. 参考文献

- 1) 越後三山・奥只見自然公園学術調査報告(1968)羽田健三他、(P219～P232)
- 2) 越後駒ヶ岳の鳥類 渡部通(1978 野鳥新潟第44号P3～4)
- 3) 鳥類生息状況調査報告書(1982.3 新潟県生活環境部自然保護課)
- 4) 北魚の自然と理科教育第6集(1979北魚沼地区理科教育センター)越後駒ヶ岳の鳥類 柳瀬昭彦
- 5) フィールドガイド 日本の野鳥 高野伸二 (財)日本野鳥の会
- 6) 新潟県文化財調査年報第15集、南魚沼1977 新潟県教育委員会 P84～P137)

麻酔あらかると

新潟大学医学部

益 子 和 徳

I 先生の知識欲の旺盛なことにはつねづね驚嘆してはいたが、今度野鳥とは無縁の私に貴重な紙面を埋めよとの御命令には動転した。しかし麻酔というものへの関心のきっかけにでもなればとはなはだ厚かましい気持であえて引受けた次第である。

麻酔という言葉との出会いは、まず何かの外科手術を受けねばならない時にはじめて関心のもたれる事柄であろう。局部麻酔という言葉が定着し(医学用語では局所麻酔)、抜歯、抜爪、小切開など外科処置に伴う痛みを軽減することを体験された方も多いだろう。一方全身麻酔の安全性に対する理解もすすみ最近では小手術でも全身麻酔を希望する人がふえている。すなわち手術中の不気味な時間を意識のない眠ったような状態でおろそぎてしまいたいというわけである。どんな手術であれ、手術中のことはまったく記憶にないとしたら全身麻酔だったと考えてよい。

脊髄の周囲に麻酔薬を注射して下半身に無痛を得る脊椎麻酔(腰で行うことが多く、腰椎麻酔と呼ばれる)もよく行われる麻酔法の1つである。そしてこれらの麻酔を専門とする医師の増加とともに手術のための麻酔だけでなく、病気の治療手段としての麻酔も医療の中で重要な役割を担いつつある。

□ 麻酔の先進国・日本

わが国は全身麻酔が医療の目的で行われたことでは世界の最初である。華岡青洲という名やその業績は演劇として上演されたり、テレビでも放映されているので御存知の方も多いであろう。彼が創りだした麻酔薬は草根木皮を配合した「通仙散」と称するものであった。これが生みだされるにはイヌを使った多

くの実験だけでなく、母於継や妻加恵の献身的協力を忘れられない。ことに加恵は不純物の多い未完成品を幾度も試飲し、失明しているのである。おそらくベラドンナ類による緑内障を発症したものと思われる。このような涙ぐましい研究の結果、通仙散が完成し、これを用いて世界で最初の全身麻酔下での乳癌摘出術が行われたのである。1805年(文化2年)であった。当時は鎖国の途上で、このすばらしい成功は世界の人々の知るところとはならず、後の世になって明らかとなったのである。一方現在のようにガスを吸入して全身麻酔をつくりだす方法は1844年米国のウェルズが創始とされている。青洲におくれること40年である。この時使用されたガスは亜酸化窒素(笑気)ガスで、これは現在でも多用されている。

□ 生物実験は麻酔がきめて

動物愛護の気持の強い会員諸兄姉には不快な内容で申訳ないが、科学者ことに生物系研究者にとって動物実験は生命である。研究の成果はいろいろな学術誌に掲載されるが、実験がどのような麻酔のもとで行われたかを明記してなかったり不十分な麻酔と考えられるものは発表を拒否される。動物には絶対に苦痛を与えないという倫理上の問題が第1に優先されているのである。また麻酔法や薬が全く逆の結果をひきおこすこともある。麻酔を研究しているのは臨床医だけではない。

□ 矢毒も麻酔に使う

胃とか胆のうなど腹部の手術は多い。このとき腹筋がやわらかければ小さい手術創でも広い手術野が得られるなどの利点がある。このような目的でアマゾン河流域の土人が矢毒として使っていたクラレーと呼ばれる薬が使われる。もちろん薬品として合成されたものである。この中のある種のもは鳥類に投与すると強直性痙攣をおこしかちかちになる。哺乳類の反応とは著るしく異なるのは筋の構造が違うのかもしれない。

北魚・破間川流域に生息する鳥類

石部 久

I はじめに

守門村における破間川は、中流域としての性質を持ち、豊かに流れる水量ととりまく樹林や地形がおりなす環境により、流域を利用し生息する鳥類は多い。ここにみられる鳥類の分布や生態について調べてきたが、1979年4月から1983年3月までに観察された鳥は、15目36科116種類である。

この調査結果をもとに、流域を利用し生息する鳥類についての概要を報告したい。

II 調査地の位置と環境

破間川は、浅草岳(1586m)、守門岳(1538m)、末丈ヶ岳(1553m)より流れを発生し広瀬村を通り、北から守門村にそそぎ込む。開けた村内の中央部を南へ流れ、広神村を通り、小出町に入った川は、魚野川へ合流する。守門村を流れる破間川の総延長は13.5 Kmあり、大きく蛇行して流れ、段丘を形成している。川は、村の中心部から南にダムがあり冬季3m～5mの著しい積雪量でも雪にうずめられることはない。

流域一帯は、標高が200m～350mであり発達した段丘に田畑、人家、国道、草地がある。流域にそってホオノキ、トチ、クリ、ウワミズザクラ、コナラ、などの広葉樹や植林によるスギなどの針葉樹が林を形成している。

タニウツギ、ユキツバキ、マルバマンサク等の背丈の低い木が、流域のガケに多く繁っている。流れに沿った、渋川、松川地区の一部では、発達したブナ林があり、須川地区西岸と東岸には人工のスギ林が発達している。

ダム下流は、川原が発達し植物相もそれにともない、ヤナギ、ヨモギ、アシが生育している。

III 調査方法

調査は時間を定めず、可能な時間を観察にあてた。

須原小学校理科クラブの児童と共に、本流域に生息するヤマセミ(カワセミ科)の生息領域について調べてきている。朝6時～7時夕5時～6時までが研究の時間に当ててあるため、同時に記録を集めたものである。

調査記録は、蛇行の多い破間川に沿って兩岸約500mずつを対象としたものである。

IV 結果と考察

本地域は、雪積による鳥に及ぼす影響が大きいこと。樹林帯があるのは、破間川流域沿いで、他は樹林が非常に少ないこと。ダムがあり流量が豊富にあること、ダム上とダム下では、川の環境が著しく違うこと。低山が村の東側と西側にあるが、原生林が著しく少なく他は二次疎林、雑木林である。

以上のことを留意しながら、流域における季節変化の鳥類相をのべてみる。

ここでは、3月～5月を春期、6月～8月夏期、9月～11月を秋期、12月～1月を冬期とした。

本地域で冬期、地面の露出している箇所は小高い山の急斜面と破間川の兩岸の急斜面に雪崩が発生する場所だけである。このことから、冬期、みられる鳥は、ガンカモ科、ワシタカ科、カワセミ科、シジュウカラ科等に限られ、羽数も少ない。



初夏の破間川流域景観

春期は、4月中旬まで雪があるが樹木には花や葉が出る。鳥の動きも活発になり、夏鳥漂鳥とされる種もみられ、旅鳥も渡りの途中一時的な休息地として流域の樹木や草地を利用する。シマセンニュウ、ノビタキ、などがみられる。本流域で繁殖するノジコは、村内でも多く目につく種であるが、流域では東岸の雪崩のおこる場所にみられ西岸にはない。

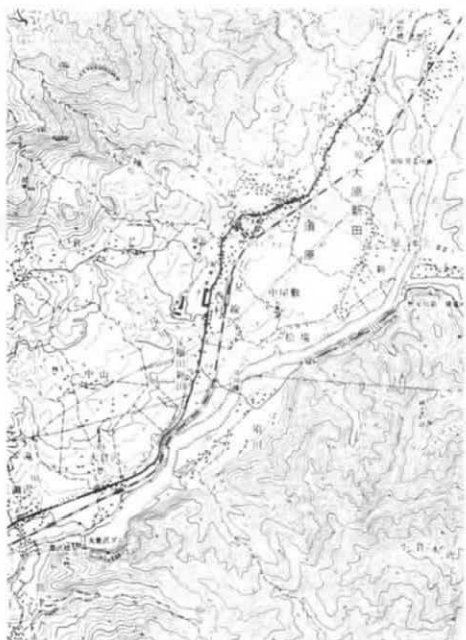
夏期7月までは、繁殖期にあたるため、他期に比較し種は限られるが、鳥の羽数は多い。ゴイサギ、ヒクイナ、オオヨシキリ等の種は村内にある少ない湿地、アソ原を利用し少数繁殖している。8月に入るとヤマセミ、カワセミなどが破間川へそそぎ込む小さな沢、川等へ巣立ちした幼虫をつれ生活しているのがみられた。

秋期は月平均27種観察した。9月下旬から鳥の移動がみられるようだが、春期の渡り程、目立つ動きはない。10月に入ると昼夜の寒暖差が激しく、川面にはガンカモ、カイツブリの仲間の羽数が多くなる。流域近くの田畑には、スズメ等を追いかけて、チョウゲンボウが出没する。

留鳥として生息する、本流域にみられるオ

ンドリ、ヤマセミ、カワセミ、カワガラス等は、隣接する他地域では、多雪により、川や沢等がうずめられるため、他方に移動するが本流域では、1年中川の水量が多く、雪でうずめられることはないことから周年生息していると考えている。

最後に紙面の関係で観察された鳥類の種名だけを書き報告を終える。



調査地地形図

守門、破間川流域に生息する鳥

(記載した種の配列は日本鳥類目録による)

科名	種名	種別	科名	種名	種別	科名	種名	種別
カイツブリ	カイツブリ	留鳥	コウノトリ	コウノトリ	留鳥	セキレイ	セキレイ	留鳥
ツバメ	ツバメ	留鳥	カワセミ	カワセミ	留鳥	ハクセキレイ	ハクセキレイ	留鳥
ノビタキ	ノビタキ	留鳥	ゴウノトリ	ゴウノトリ	留鳥	ツバメ	ツバメ	留鳥
ノジコ	ノジコ	留鳥	カワセミ	カワセミ	留鳥	カイツブリ	カイツブリ	留鳥
シマセンニュウ	シマセンニュウ	留鳥	カワセミ	カワセミ	留鳥	カイツブリ	カイツブリ	留鳥
...



本流域で一年を通して生息するヤマセミ

鳥類目録作成のための調査研究は、北魚 守門村 須原小理科クラブ員 (現守門中) 佐藤潤、佐藤善行、佐藤留美子、平井猛、目黒英紀君等の活動から生まれた資料である。

1984年 ガン・カモ・ハクチョウ類 全国一斉調査結果 (新潟県支部)

調査研究部 小野島 学

日本野鳥の会で、全国一斉に実施しているガン、カモ、ハクチョウ類の生息調査に、当支部も多くの会員の協力を得て参加したので、その結果を述べる。

1. 調査地及び調査方法

今年は 25 の調査地を選定し県野鳥愛護会と合同で、各調査地の担当調査員が定点及びオオパンの個体数を調査した。

2. 調査地及び調査方法

図1のとおり、ガン類が2,131羽、カモ類が45,521羽、ハクチョウ類が4,228羽、オオパンが5羽観察された。

ガン類は、マガン、ヒシクイの2種が2,131羽観察され、例年どおりヒシクイは福島潟、鳥屋野潟、佐渡、朝日池の4か所、マガンは大河津分水、朝日池の2か所であった。

ハクチョウ類はオオハクチョウ1913羽、コハクチョウ2,295羽の2種が観察され、瓢湖でオオハクチョウが多くみられたのに対し、福島潟、鳥屋野潟、佐渡ではいずれもコハクチョウが多くみられ、例年にない多くの個体数であった。

カモ類は19種観察され、優先種はマガモ19,162羽(42%)、カルガモ9,690羽(21%)、オナガガモ8,530羽(19%)、コガモ7,154羽(16%)で4種で98%を占めている。めずらしい種は瓢湖のアメリカヒドリ、鳥屋野潟、佐渡のオカヨシガモがあげられるが、両種とも毎年わずかながら渡来が確認されている。

3. まとめ

今冬は、例年にない豪雪にみまわれ、冬鳥特に大型のハクチョウ類が採餌不足により衰弱、死亡する例がたびたび報道されている。その中で本年調査結果からも平年以上の冬鳥の南下が示唆されている。今後も経続調査を行うことにより、多くのデータを積みあげ冬鳥の渡りについて考えてみたい。

最後に、本調査に協力を頂いた各地区リーダー並びに調査員に深甚なる謝意を表します。

図1 1984年ガン・カモ・ハクチョウ類

No.	調査地			鳥獣保護区等	ガン類					ハクチョウ	
	市町村	地名	地名		マガン	ヒシクイ	マガン	小計	オオハクチョウ	コハクチョウ	
1	村上市	三面川(河口)	河口	無				0			
2	"	岩船港	海湾	無							
3	中条町	桃崎浜	海岸	無							
4	黒川村	胎内川(鼓岡)	河川	保							
5	水原町	瓢湖	湖沼	保				0	1700	400	
6	豊栄町	福島潟	"	保			1307	1307	7	268	
7	新潟市	阿賀野川(河口)	河川	無				0			
8	新潟市	阿賀野川(阿賀川橋)	"	無				0		57	
9	五泉市	阿賀野川(荻野島)	"	銃				0		0	
10	津川町	揚川ダム	人造湖	無				0			
11	新潟市	鳥屋野潟	湖沼	保			45	45	5	641	
12	"	佐渡	"	保			234	234	185	927	
13	寺泊町	信濃川(河口)	河口	無				0			
14	与板町	信濃川(大河津分水)	河川	無	24			24		3	
15	越路町	信濃川(越路橋)	"	無				0			
16	小千谷市	山本調整池	人造湖	保				0			
17	小出町	魚野川(小出)	河川	保				0		1	
18	六日町	魚野川(河川敷)	"					0			
19	十日町市	浅原調整池	人造湖	銃				0		1	
20	中里村	宮中堰堤	"	無				0			
21	西山町	井岡・五日市	"	休				0			
22	柏崎市	荒浜原発構内	海岸	無				0			
23	"	番神・鱒石川	"	保				0			
24	大潟町	朝日池	湖沼	保	11	430		441		13	
25	頸城村	大池・小池	"	保				0			
26	上越市	鮎ヶ城跡堀	城跡堀	保				0			
× 合計 (25か所)							35	20%	2,131	1,913	2,295
○ 合計 26か所							35	20%	2,131	1,913	2,295

※ 保：鳥獣保護区

全国一斉調査結果 (新潟県支部)

1984. 1. 15

ウ類	カ モ 類																			種小計	オオバン									
	ハタチ	小計	アカツクシガモ	ツクシガモ	オンドリ	マガモ	カルガモ	コガモ	トモエガモ	ヨシガモ	オカヨシガモ	ヒドリガモ	アメリカカヒドリ	オナガガモ	シマアジ	ハンビロガモ	ホシハジロ	アカハジロ	キンクロハジロ			スズガモ	クロガモ	ビロードキンクロ	シノリガモ	コオリガモ	ホオジロガモ	ミコアイサ	ウミアイサ	カワアイサ
0					74	2																		1					77	3
					150	600															1								751	3
					35	70																							105	2
							650																						650	1
2100					10050	111	517	33			275	1	8020	6	170	176										20			1197	13
275					120	75	3						6																204	7
0																													0	0
59																													59	1
0					1	34	59																			9			103	4
0						12																							12	1
646					965	1534	3059		2	1	4	7		1	10		3	4							52			5692	15	1
20	130				3345	33	754		1	2	1	385																4717	10	4
0					126	165																	3			1			275	4
3																													0	2
0					15	38	120																		24	1	39		60	6
0					1005	1540	787					68		12	29		23									2			3446	8
1					2	46	52																				8		108	6
					62	283	28		5	12		1															1		392	7
1					480	1320	780					43		29		47	3								2				2704	9
0					80	200	3																			4			287	4
0																													0	0
0					2700	1500																							4200	2
0					80	250																							330	2
13																													0	3
0						20																							20	1
0					2	8	2143																						2154	4
20	428				2	1742	7670	7154	36	3	3	280	1	8530	19	258		249	7	1	3				27	79	57	4521	23	5 ←X
20	428				2	1924	9773	7182	36	8	3	290	1	8531	19	258		249	7	1	3				27	79	58	4573	23	←0

休：休猟区 無：無指定 (一般猟野) 銃：銃猟禁止区域

野鳥の会の運営と野鳥保護

大 島 基

何故自然を保護しなければならないか。それは人間も生物であるから、生物である限り何時か死に土に帰るから、と書き出すと宗教的になるが、もっと身近な問題として、自然が破壊されれば野鳥は姿を消し、我々の愛する可憐な姿も歌も無くなる。詩人は詩を失ない、写真家は被写体を失ない、自然を綴る名文も生まれない、何としても自然を保護し、野鳥を守らねばならない。その方法が問題である。

1. 野鳥を守る人を増やすこと、そして団結し力を提供しあうこと、すなわち野鳥の会員を増やすことにある。数の力により行政に働きかけ、残さねばならない自然、無駄な自然破壊をさせない。

2. 野鳥の会員は力を提供しあう、それは数であり、金であり、物であり、情報であり、データであり、知恵である。

3. 力をまとめ、より効果的に運用してゆくために、すぐ金が掛り、人手が必要となる。現在230人以上の会員がいるが、果して皆さん満足されているのだろうか、否であろう。会員としての楽しみは野鳥と接することのできる探鳥会であり、スライドや8mmを見、鳥の話を交換し合う集いであろう。これを1年間を通し、満足のゆく行事を実行してゆくにはやはり人手と金が必要となる。県内に種々の野鳥グループがあり個々に活動しているが、これに参加できるように情報を聞くことができれば、これも会員としての特典となるだろう。反対に自分が送りたい情報を何時何所に送ってよいか分らなかつたり、面倒だつたり



日本野鳥の会は次代の子供達に何を伝えられるのだろうか

して有耶無耶にしてしまった経験を持たれる方があると思うが、これについても常に情報を提供してくれる所と人が必要である。現在事務局として役員として忙しい仕事の間をやりくりし、手弁当で会の運営を負担していただいているが現状が精一杯である。県内全域の会員と密接な情報交換ができ、他の団体との接触・情報収集を頻繁にやってくるには早急に独立した事務局と専従職員が必要である。

虫の良い話であるが無料で場所の提供を願い、ボランティアの専従職員を懇願する次第です。事務局の仕事は今やっている以外沢山あります。

- 過去の野鳥の会員との連絡・勧誘
- 野鳥に関する過去のデータ整理

○野鳥に関する現在の情報収集と整理
 ○他団体との情報交換
 ○他団体との保護に関する意見交換
 等々限りない。このことの積み重ねが保護団体として活動の基礎になると思うのです。新潟県は自然にも野鳥にも恵まれ、野鳥の生態研究と、そのデータに関しては日本一ではないか、と思われるが、これも先輩方が残した大切な財産である。是非日本野鳥の会新潟県支部として継承し、活用してゆきたい。しかし保護に関しては他県に比べ大分見劣りがします。野鳥を見、聞いて楽しむ権利を十分満喫しつつ、保護する義務を果して行きたいと思えます。会員諸兄の絶大なる御協力をお願い致します。

寺泊探鳥会 (59年 2月 5日)

日本海厳冬の寺泊

渡辺弘雄

厳冬季のバードウォッチングを寺泊でと言うことで、今年度も年間計画通り実施された。今シーズンは周知のように、近年にない大雪となり、また連日の寒波による道路状況の悪化も重なったが、児童を含めて総勢53名の参加をみた。当日の寺泊海岸は白一色の雪景色であり、午前中の野外観察は、寺泊港から海岸道路に沿って、出雲崎までのコースを探索した。朝から降り続いていた粉雪も止み、久し振りに冬の陽も差す探鳥日和となる。コースの途中、輝く海面に数羽のオオハムとマガモの群を目にし出雲崎では群れるカモメ類の姿を、間近に観察出来た。ハジロカイツブリ、ジョウビタキ、タゲリ等は人影に驚く様子もなく、近距離でカメラの被写体となる。



寺泊港の探鳥風景



午後は観察した野鳥について、一種ずつ詳しく説明があり、理解を深めた。更に研究部から、日本海の家鳥について、巾広い話しを聞き、質疑の後散会した。

＜確認した鳥＞ (31種)

オオハム、ハジロカイツブリ、アカエリカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、クロサギ、ウミアイサ、マガモ、トビ、キジ、シロチドリ、タゲリ、ハマシギ、ユリカモメ、オオセグロカモメ、セグロカモメ、カモメ、ウミネコ、キジバト、ハクセキレイ、セグロセキレイ、タヒバリ、ヒヨドリ、ジョウビタキ、イソヒヨドリ、ツグミ、シジュウカラ、スズメ、オナガ、ハシブトガラス、ハシボソガラス



網木川のヤマセミ

大橋孝雄

厳冬という言葉がびつたりのこの2月。三川村は網木川を訪れた。昨年12月、降りしきる雪の中木枝にじっとたたずむヤマセミの姿に、なにやらすがすがしい美しさを感じて以来である。だが、この日はとうとう奴は姿をみせなかった。半分ちかく凍った川面をみつめながら、昨年11月来ぶつたりと姿を消したカワセミのことを考えていた。そもそもこの川へは、カワセミめあてにかよっていたのだ。春中そこかしこの川を捜しまわりようやくめぐりあえたカワセミであった。もはや季節は夏となり金色の陽光の中、身づくろいする姿がただただまぶしかった。だがそのカワセミがこの冬のきびしさを予知したのか、冬となる直前にどこへやら姿を消したのである。どこへといって捜してみようもなく、また馴れ親しんだこの川を離れ難く、そうこうするうち雪の季節となった。それでも春には再び現れてくれるものと信じ、ヤマセミには失礼ながらそれまでのつなぎにと観察させてもらっているのであった。このような不心得のためか、ヤマセミまで姿を消してしまったというのか。翌週再び網木川を訪れた。除雪のため3mちかく積み上げられた雪の壁を乗り越え観察点へいく。と、なんと奴のいつもとまっている木のあたり一面雪崩のため山肌があらわとなり、川は雪ですっかり覆われているではないか。なんとということか。しばらくの間にも考えていなかったように思う。諦めた。実はここへ向う途中の大きな川でヤマセミをみたのである。今までそのあたり見かけたことはなかった。いやな予感がした。そして雪崩である。その場を動く気にもなれず1時間ほどすると、なにやら例の木の対岸に動くものがある。望遠鏡を向けると、まさに奴であった。どうやらこのヤマセミとは長いつきあいになりそうである。

鳥・羽毛雑感

竹前和徳

様々な鳥の羽が人間の眼に映る時の色あいが気になった。昨年の11月30日、私が自分のフィールドと決めている落堀川の付近を歩いてみました。落堀川とは紫雲寺町と中条町の境界を流れる川で江戸時代に干拓のために湿地より水を海に落とすために堀られたものを始めとする川です。私はここと加治川の河口付近を自分のフィールドと決め、時間のとれる時はできるかぎり歩くようにしています。

この日2羽のアオゲラを観察することができましたがその体色に少し戸惑ってしまいました。昨年の5月に奥胎内で見たとアオゲラよりも背の緑色の黄色味がかなり強いのです。主観的印象ですから多少の違いはあるでしょうが、それにしてもかなりの差に感じられました。

では図鑑ではどうかといいますと、私が野外での識別に使っているのは、いずれも日本野鳥の会の出版ですが、“野外観察ハンドブック”の新旧“フィールドガイド日本の野鳥”の3種ですが、これでアオゲラを比べてみると背の緑色の強いものの順序は、“野外観察ハンドブック”(新)、“フィールドガイド日本の野鳥”、“野外観察…”(旧)になります。奥胎内での環境は暗い木陰であり、落堀川では比較的開けた明るい林でした。したがって条件の違いによっては、かなりの相違があるとも考えられ、また図鑑の色の違いは印刷条件の違いなどもありどれが正しく、どれが間違いとはいえないと考えられます。とはいえ色の微妙な変化による人間への印象への影響は無視できないものがあり、私には興味深く感じられます。

この日は他に、カイツブリ、ハマシギ、ウミネコ、ユリカモメ、アカゲラ、ジョウビタキ、オナガなど18種の鳥を見ました。出合いのあるこのフィールドを私は大事にしてゆきたいと考えています。

信濃川散策

山本初栄

「困ったなあ、こんなところでは電話をかけてきくこともできないし……」

去る12月10日(土)信濃川の土手で22人の子供達にとり囲まれながら、内心の動揺を隠すように望遠鏡をのぞく。

初冬の午後の陽ざしは暖かく旭橋から降りて河原を歩くと岸辺の砂にカモメやセキレイたちの足あとが点在し、それらの名前あてをしながらの散策が心楽しさを感じさせる探鳥会の順調なすべり出しだった。それなのに、15kmばかり下って、小千谷大橋附近の中州にいた大群を見つけた時は驚いた。胸の黒、腹の白、ふっくらした身体つきと何よりも頭頂にゆれる長い冠羽。60羽をこえる数。

図鑑に目をこらしながら、子供達も口々に「タゲリだ」と言っている。校長室の剥製の他に一羽見ただけだから、レンズでとらえたはるか遠くの大群に出合っても自信ない。

普段の学校の活動(野鳥クラブ、課外活動等)では、幸いまわりに野鳥についてベテランの方がおられるので何かと相談したり指導していただくことにしている……

しかし、土手の上からは、豊かな水を運ぶ瀬音が聞こえるだけで巷の喧騒が懐しくなるほど心細くなる。いつもこんな調子の頼りない引率者ではあるのだが……

この日は、ユリカモメ、セグロカモメ、セグロセキレイ、ハクセキレイ、カルガモ、オナガガモ、コガモ、カワアイサ、アオサギ、スズメ、ハシボソガラス、トビ、それとタゲリを見つけることができた。

二時から歩き始めてちょうど二時間経った。ほほに当たる川風も冷え、双顔鏡やメモ帳を持つ子供たちの小さな手も凍えはじめてきた。鳥の足跡の写真、トビやカラスの羽根を宝物のように持った子供達の満足そうな顔を救いにして帰路についた。

白鳥の群湖埋めて雪やまず
闘はず立つ雪沼の尾白鷺
湖の濁り白鳥かくす雪しぐれ

よし子

雪^{ゆき}

催^{もよひ}



新潟市にすむ私が鳥屋野湯をおとずれ、尾白鷺にであったのは、雪がしずかにうめつくす1月末だった。

湖のくらくしずむしじまの中で鳥たちの生きぬくけん命な姿をみた。

事務局だより

すでに野鳥誌で御存知のことと思いますが、5年に1回環境庁が行う「緑の国勢調査」の第3回にあたる今年は、冬鳥の分布調査を日本野鳥の会が担当し、県支部にも協力依頼がありました。そこで図のように、すでに本部へ調査を申込んだ会員を含め、各地域で中心になって調査していただく会員を指定させてもらいました。この皆さんへは4月に調査に関する用紙が本部から送付されますので、ご協力をお願いします。なお、1調査地の調査員は多いほどよいですので、会員の中で調査希望のある方は、今からでも調査地(1~38)を指定して住所氏名を野鳥学まで連絡ください。メ切りは、6月30日です。

冬鳥分布調査の内容

- (1) 目的：冬期生息する鳥類の全国分布図をつくる資料とするとともに、県内の分布状況を把握する。
- (2) 調査期間：昭和59年12月～昭和60年1月の2か月間を自由な日時を選んで調査する。
- (3) 調査地：県内では5万分の1地形図38か所を対象とする。
- (4) 調査方法：1調査地が100メッシュに区切

られ、うち何メッシュも調査できる。メッシュ毎に調査票を1枚使って記録し、同一メッシュを何回調査しても良い。

- (5) 調査内容：調査対象は調査期間に観察される鳥類全種。記載方法はメッシュ毎に
1. どの種が 2. およそ何羽単位でいたかの2項目を調査する。
- (6) 調査結果：本部から5万分の1地形図、調査票等調査用紙が送付されるので、観察結果を記載した調査票を本部に1部、支部事務局に1部、昭和60年2月15日までに送付する。5万分の1地形図は、調査後返納不用。

集計した結果は、本部は野鳥誌 Strix、支部は支部報等で公表する予定です。なお、調査は全てボランティアでお願いいたしますので、郵送費等は各自の負担にならないようにします。会員の皆さんの御協力をお願いします。

○連絡先 代表調査員 小野鳥学
〒959-04 新潟県西蒲原郡西川町学校町 67

No.	調査員	No.	調査員	No.	調査員	No.	調査員
1	宮越一俊, 小野鳥学	14	斉藤久夫, 渡部通石部久	29	中村登流, 山本明, 中島公, 村山暁	36	中村登流
2	宮越一俊, 小野鳥学	15	渡辺弘雄, 星野元郎	30	村山暁, 村山健, 関谷八郎	37	林克久
3	宮越一俊, 佐藤一平	16	渡辺弘雄, 山守正新, 星野元郎	31	林克久, 斉藤仁, 村山暁	38	高橋正良, 富田宗一, 斉藤仁
4	宮越一俊, 小野鳥学	17	松井省磨, 木下徹, 星野元郎	32	桑原民生, 斉藤仁		
5	加藤誠一, 小池重人, 山田清	18	斉藤久夫, 石部久	33	伊藤卓夫, 鷺沢澄夫		
6	加藤誠一, 小池重人	19	斉藤久夫, 石部久	34	伊藤卓夫, 鷺沢澄夫		
7	風間辰夫, 吉川吉枝, 五十嵐敏行, 塚原真司, 星野元郎	20	小林成光, 伊平清士, 星野元郎	35	中村登流, 根津和育, 蓮尾任志		
8	千葉晃, 小松吉蔵, 高橋秀恵, 佐藤一平, 塚原真司, 星野元郎	21	渡辺央, 高綱勉, 箕輪貴一, 星野元郎, 佐藤一平				
9	本間隆平, 白井康夫, 高橋小夜子, 岡研一, 塚原真司	22	渡辺央, 高綱勉, 箕輪貴一, 星野元郎				
10	渡部通	23	古川弘				
11	渡辺弘雄, 田中秀夫, 修理総一郎, 塚原真司, 星野元郎	24	小林成光, 伊平清士				
12	熊倉一了, 塚野金松, 岡研一, 塚原真司, 星野元郎, 松谷久也	25	中山正則, 柳瀬昭彦, 箕輪貴一, 山本初栄				
13	斉藤久夫, 石部久, 岡研一, 塚原真司	26	小沢文雄, 石部久, 箕輪貴一, 山本初栄				
		27	伊藤卓夫, 鷺沢澄夫				
		28	中村登流, 山本明, 蓮尾任志				



春の湯之谷・銀山平へ

昭和59年度 日本野鳥の会県支部総会のご案内

この冬、各地に寒波がもたらしたつめあとは大きく、鳥たちにも、地域の人々にも、大変な季節だったようです。県支部も、毎年の春の総会は四月中にということだったのですが、当初予定した、糸魚川、長岡案が雪のために取りやめになり、特例ということで五月の湯之谷村ということに決定いたしました。湯之谷の五月は、さわやかな青と、若葉の緑、白銀の残雪、そして花たちで装い、雄大な三山が広がっています。次の日は、奥只見の入口、銀山平で残雪の中を鳥たちを訪ねたいと考えております。オオルリ、キビタキ、ノジコ、アオジが若葉の枝先で歌う姿をみせてくれるかもしれません。もし運がよければ、イヌワシも空に飛ぶかも…

記

総会案内

期日 昭和59年5月12日(土曜日 午後5:30)
場所 新潟県北魚沼郡湯之谷村大字折立
国民宿舎 湯之谷荘 02579(5)2206
交通 国鉄 小出駅(上越線小出駅)下車
バス 大湯温泉行、栃尾又温泉行 折立温泉下車
内容 事業報告、予算等 その他

研修会

研究発表等 (発表者 募集中)

探鳥会

5月18日(日曜日)
集合 湯之谷村 湯之谷荘前集合 8:00
場所 銀山平 北又川付近
(湯之谷荘から車でシルバーラインを通り向かう)
経費 1泊2食 5,050円(他若干用意おねがいします)
申し込みは、県支部事務局へ ハガキか電話で

場所等の連絡先 事務局か 柳瀬昭彦先生 02579(2)1439 へ

事務局特派員だより

東蒲支局

渡 部 通



今冬は強い寒気団の南下で日本列島が厳しい寒さにみまわれ、各地で雪や寒さに関する記録の更新やニュース等が相ついだ。新潟市では、根雪日数が100日を越え戦後最長の記録となった。東蒲原地方も低温傾向が続いたため、降り積もった雪がなかなか解けず、根雪期間が大巾に延びそうな状況である。ところで、今冬の話題といえば、カワアイサが例年になく大きな群れで越冬したことであろう。ホオジロ、セグロセキレイ、ヒヨドリ、モズといったいわば身近な野鳥たちが次々と積雪の少ない地域に移動するといった手段を構じた中で、東蒲を東西に流れる阿賀野川は冬の水鳥の天国となり、にぎやかであった。

ここには周年見られるカルガモ、カイツブリ

の他、マガモ、コガモ、オシドリ、ホシハジロ、オナガガモ、オオハクチョウとともにカワアイサが飛来した。揚川ダム付近では50羽以上の群れが毎日のようにカウントされ、♂の頭と背が黒色、腹と脇が白色のツートンカラーがひときわ目立った。しかし♀は一般の野鳥がそうであるように地味で目立たない。激しい雪が降る中、たくみに潜水し採餌する姿はあたかも冬の厳しさを詠歌しているようであり、北方の使者の逞しさが感ぜられた。3月末、ようやく春の陽光が輝き白い大地を照りつける頃、ペア同士ゆっくりと川上を大空に向かって飛びたっていった。季節は確実に春の到来を知らせる。

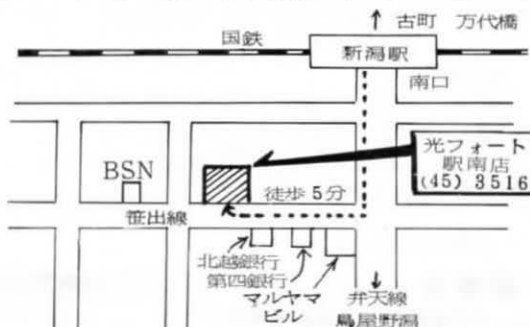
写真と文：渡部 通

県支部連絡所できる

日本野鳥の会県支部では、事務局や会との連絡先をとということで場所を探していたわけですが、このたび新潟駅南口付近にすむ中川孝三氏にお願いし、野鳥の会の趣旨を説明したところ、連絡ならば、ということで引受けていただいた。

中川氏は、東蒲原郡津川町の生まれで、1人の奥さんと2人の子供を持つ、35才の父親です。三年前より、駅南に写真屋さんとして独立したわけですが、経営でいそがしい中、「次の世代の子供たちのために、かわいい鳥たちのために役に立てれば」といって、当事務局の願いを聞いていただいたしだいである。

今後、駅から徒歩5分のこの場所を使わせていただいて、会運営の一端をつないでいきたいと考えている。



連絡先としての内容

- 会費や入会手続き等
- 日本の野鳥などの書籍類の申込み
- 野鳥の会の出版、販売物の展示、申込み
- 事務局や野鳥の会への言付け
- 会員への伝言

販売物について

バードウィーク（5月10日から）が近づいてまいりました。野鳥研究、探鳥に出かける時、ぜひ、バッグに1冊野鳥図鑑を。

会員には、支部で、購入援助もしています。手に入れるまで少し手数がかかると思いますが、利益は、すべて県支部活動費になります。また鳥の本が必要な時は、「こんな内容の本」と言っておけば、日本で出版されている鳥の本は、だいたい相談に乗ります。事務局へ連絡下さい。

◆販売物名（県支部連絡先の光フォート駅南にもおいてあります。）

- フィールドガイド日本の野鳥（3200円）
- FG. Birds of Japan（2900円）
- 山野の鳥、水辺の鳥（各 500円）
- 探鳥地ガイド777（1400円）

○その他 野鳥、カワセミ、ヤマセミ、イヌワシ等のプリントされたTシャツや、エプロンなど、バッジ等もたくさんあります。もし関心のある方は、事務局か光フォート駅南まで連絡下さい。

県支部会員のかつやく

県支部会員 叶内拓哉さん 写真集を出す

写真集 鳥景色 講談社 3,800円

野鳥のカメラマンとして生きる叶内さんが 愛のぬくもりでとらえた四季折々の鳥たちの表情、大自然に生きる鳥たちの詩

1946年 東京生まれ、奥さんは 新潟県津川町生まれ

〒182 東京都調布市小島町 3-82-6 さつきコーポ 201

カメラ
写真用品
D・P・E
カラープリント
視聴覚機器販売

●HIKARI PHOTO
光フォート

新潟市米山1丁目(北越銀行向) ☎0252-45-3516

古町店/新潟市古町通三番町557-1 ☎0252-23-0689

チェーン店 津川店/東蒲原郡津川町 ☎02549-2-2155

会費納入について

県支部では会費を納めていただくようお願いしております。昭和59年度会費が、そろそろ集まっておりますが、昭和58年度分を、まだ納めていない人が、70人ほどおります。会の運営は、すべて会費1500円でまかなわれております。

会費は、日本野鳥の会の場合、新潟県は、一本化になっておりますので、本部費4000円、支部費1500円、合計、年額5500円を納入して下さい方がいいわけです。（新入会員は500円を加えて6000円）

納入方法は、郵便振替が安く便利です。その時、住所、氏名、連絡等、入金内容を明記するようお願いいたします。

◆申込み先（どちらかへ）

〒150 東京都渋谷区渋谷1-1-4

日本野鳥の会

（振替口座 東京 4-98389）

〒950-21 新潟市五十嵐3の町

9753 石部

日本野鳥の会新潟県支部

（振替 新潟 1-6002）

★ 村山 暁 (私のフィールド)

新潟県へ3年前、帰ってきた。故郷、松之山に住み、小学校教師のかたわら、地域の人々と共に、野の鳥たちを追いかけている。地元の人々と綴る研究誌「アカショウビン」(代表 村山 健)は、数多く刊行中である。好きな鳥はヤマセミらしい。

〒942-14 東頸城郡松之山町大字坂下219 TEL 025596-2297

★ 中村 登流 (野鳥の生物学)

授業、調査、研究、学会等で御多忙のなか、新潟県のため支部報で野鳥の生物学を講義していただいている。専攻は生態学、特に鳥類の社会、群集構造の研究。上越教育大学の先生。

著書「森のひびき」には、先生の若き頃の研究の足あとや大自然への熱き想いが感ぜられる。そこには、野山を、科学を求めて駆ける研究者の、詩人の姿があることを知るはずです。他、著書に「鳥のいるけしき」大日本図書「鳥の社会」思索社 ほか多数。

〒943 上越市山屋敷町1 上越教育大学山屋敷宿舍1-205 TEL 0255(22)3519

★ 柳瀬 昭彦 (越後の山)

越後三山、魚野川をふるさとと、地域の野鳥観察に、ほとんどの休日をうめている、又、地域の青少年を育成するため活動におわれている。越後駒ヶ岳は、35回程、登って調査している。北魚の山の斜面や雑木の枝先にさえざるノジコを愛し、文学、古典音楽、地学岩石の研究と幅広い豊かな人生を歩む、高等学校の先生。

著書に「知られざる山 平ヶ岳」(共著)北魚沼理科教育センターほか、他の研究誌に数多くの文献を残されている。昭和59年5月13日の総会に探鳥する地、奥只見 銀山平は先生のフィールド

〒946 北魚沼郡小出町向山中 TEL 02579-2-1439

★ 益子 和徳 (自然と科学)

鳥とは全然縁がない非会員の氏に、自然科学ということでぜひにとお願いしたいである。新潟大学医学部で学生に教授のほか、本職は、日本麻酔医学のバイオフィア医師である。救急に関係した方は、大体この人に、お世話になっているはずである。氏の長男、重徳君は、鳥研究に熱心な学生である。美しい奥さんと三人の子供を持つ、やさしいお父さんだが、仕事は夜中でも救急医学上、メスを持ち、家をすて、愛車に乗って病院へ行かれると聞く。

〒950-21 新潟市寺尾

TEL 0252-60-2733

★ 本間 隆平 (県探鳥地ガイド)

新潟県内におこる自然や、生物、とりわけ野鳥についてのデータerをすべて掌握し、県、発展のために活動しておられる氏なしに、県の野鳥研究史は語れない。

野鳥研究のことにに関して、どんなことでもわからないことは、相談すると必ず答が出てくる人でもある。数多くの文献や著書を書き残しておられる。新潟県県庁自然保護課に勤務。

著書 「新潟県鳥獣図鑑」(共著)新潟日報事業社 他。

〒950 新潟市上所1-12 B-532 TEL 0252-45-1097

新潟県支部会員名簿訂正と補充

訂正

- 金内孝宏…二ノ町8050
- 常山秀夫 0252-86-3311
- 星野元郎…分水町大字
- 渡部 通

岩島裕子 942 上越市栄町2-8-14

佐藤孝篤 950-21 新潟市寺尾西3-24-2

松永 悦 942 上越市東城町3-2-33

深沢るみ子 950-21 新潟市五十嵐1の町6338-54 清風団地

本間隆平 950 新潟市上所1丁目12番B-532 0252-45-

松井省磨 956 新潟市大字朝日山脇246-4

五十嵐敏行 950-21 新潟市坂井東4-29-5

伊藤節子 950 新潟市神道寺1-7-1 神道寺ハイツ1-602

佐 潟

山 田
本 間 隆 平

佐潟は新潟市の南西部に位置し、海岸から約2キロメートル内陸部の砂丘にある潟湖である。一般に佐潟といわれているが、厳密には佐潟(31ヘクタール)、上佐潟(2ヘクタール)及び御手洗潟(5ヘクタール)の三潟湖の総称となっている。

この佐潟は徳川時代にすでに銃猟禁止地区となり、野鳥保護の手がのべられていたため古くからハクチョウ類が多数渡来したところとして有名であり、現在は国設佐潟鳥獣保護区に設定され、また、佐渡弥彦米山国定公園にも含まれ、自然環境破壊の規制が厳しいところとなっている。

佐潟は探鳥地として四季それぞれに野鳥観察を楽しむことができるが、冬季、ハクチョウ類、ガン類、カモ類

などを中心に多数の鳥類が集まる時、特に12月中旬から2月いっぱいが最もすばらしい。この時期には数百羽のハクチョウ類、数千羽のカモ類をはじめ、福島潟が雪におおわれると1000羽を越えるヒシクイも入ってくる。またオジロワン、ハヤブサ、オオタカ、チュウビなどの猛禽類、タゲリ、タンギ、ダイサギ、ゴサギ、アオサギ、クイナ、オオバンなどの水辺の鳥や、オオジュリン、カシラダカ、アトリなどの小鳥類が普通に見られる。さらに佐潟周辺のマツ林やスギ林には、シジュウカラ、エナガ、キクイタダキ、ミソサザイ、ジョウビタキ、ミヤマホオジロ、アカゲラなどがいて、水鳥だけでなく森林の鳥類も含めて30種くらいはいつでも見られる。

探鳥は朝早い方がよく、県道新潟寺泊線から佐潟に向かって左側の農道に入り、この農道を進みながらヨソ原の切れる見通しのよい所

や、高台から望遠鏡で観察しながら進み、佐潟を一周し、帰りに御手洗潟をのぞいて帰るのが普通の探鳥コースとなっている。さらに余力のある人は、佐潟から上佐潟一周まで足を伸ばしてもよく、この場合でも約4時間、ほぼ半日の探鳥を楽しむことができる。

冬鳥の探鳥だけでなく、4月下旬から5月上旬の渡りの時期には、サンショウクイ、ノビタキ、ツグミ、エゾムシクイ、センダイムシクイ、オオヨシキリ、ヒガラ、メジロ、ア



雪上に はばたくヒシクイ

オジ、マヒワ、ツルギ、クサシギなど、また8月から10月の秋の渡りの季節には、タカブシギ、オグロシギ、アオアシシギ、チュウサギ、アマサギ、ショウドウツバメなどが見られ、オオワン、クロツラヘラサギ、アカツクシガモなどの珍鳥も観察されている。地元のにいがた野鳥の会は例年2月に探鳥会を行ったり調査を実施し、これまでに150種あまりの観察記録をまとめている。

このように佐潟は冬鳥を中心とした最適の探鳥地であるばかりでなく、湖沼を中心に、それをとりまく湿地から砂丘、そしてそこに生育するいろいろな植物や昆虫、さらには魚類までを含めた自然観察地としても大変価値の高いところでもある。しかし、水位の低下や飛砂によって、このままではいつ消滅するか分からない存亡の危機にさらされていることを私達、野鳥に親しむ者は知っておかなければならない。

佐潟への交通は、新潟交通バスセンター発 弥彦行きに乗車、赤塚坂下で下車。所要時間約1時間。1時間に1本の運行間隔である。